

# 『不知火海沿岸』における棄民と奇病の社会的地理

## 初期水上勉論 第二回

田村景子

### 要旨

水上勉の小説「不知火海沿岸」(一九五九年二月)は、忘れさられた作品である。発表後、水上勉名の単行本や文庫本には収められず、二度の全集にも入っていない。

それゆえか、水上勉をめぐる従来の評論、研究で「不知火海沿岸」にふられることはほとんどなく、単独で論じられたことはない。

しかし、にもかかわらず水上勉は長年にわたり、「不知火海沿岸」について発言を繰り返している。みずからの戦後史を「金閣と水俣」という二つの言葉で語った水上勉にとって、実際の水俣体験を最初に作品化した「不知火海沿岸」は特別であったのかもしれない。

短篇推理小説「不知火海沿岸」は、発表から四カ月で、書下ろし長篇推理小説『海の牙』へと発展的に吸収されたというのが通説である。が、水上勉も一方でそれを肯いつつ、他方でそれに抵抗しているのがある。

本稿は、「不知火海沿岸」と『海の牙』とが、同じ社会的出来事をめ

ぐる別種の試みであると考え、架空都市「水濁市」の意義、神話的世界の華やきの只中に出現した「革命」、棄民と奇病の社会的地理、三つのストーリーライン、暴動からさらなる暴動へ、以上五つの視点から、「不知火海沿岸」の作品分析を試みる。小説「不知火海沿岸」こそが、『海の牙』さらにはN県水俣病をあつかう戯曲「海鳴」(「テアトロ」一九六七年九月)へと続く水上勉の「水俣」にとって、避けてはとれない端緒なのである。

### 1 掲載誌期待の「新人による異色あるスリラー」

短篇小説「不知火海沿岸」は、一九五九年二月二八日発行の季刊「別冊文藝春秋」七〇号に掲載された<sup>(1)</sup>。

「芥川賞直木賞作家特集」と銘打たれた「別冊文藝春秋」七〇号の目次には、石川淳、芝木好子、松本清張、安岡章太郎、吉行淳之

介、菊村到、開高健、大江健三郎ら新旧の芥川賞受賞作家、村上三三、富田常雄、新田次郎、城山三郎、多岐川恭、戸川幸夫、井伏鱒二ら直木賞受賞作家らの名が賑やかに並ぶ。

そんな目次の最後の一際目立つ囲みの裡に、水上勉の「不知火海沿岸 一三〇枚」と村松梢風の「塔（タワー） 一〇〇枚」のタイトルがみえる。作品にはそれぞれ、「新人による異色あるスリラー、水滸病発生によって暴動化する地方都市を中心に謎の殺人事件勃発!」、「東京の新名所タワーの下で演ぜられる老作家加賀美とナイトクラブのダンサー瑠璃子との素裸の情事」という言葉が付された。ベテラン作家の村松梢風と新鋭の水上勉を組み合わせて目を引こうとする編集部の狙いもうかがえるものの、ここでの主役は水上勉に違いない。二人の作家と作品の示された囲みの直前には、「推理小説ベスト・ワン」と題された囲み企画があり、梅崎春夫、堀田善衛、平野謙、荒正人、大岡昇平、江藤淳ら執筆者たちの推す作品が並ぶ。これらのメンバーにコラム的な短文を書かせるという贅沢な企画は、「別冊文藝春秋」も数年前から始まった推理小説ブームを強く意識していたことを示し、今号では新人の水上勉を掲げた格好なのである。新しい推理小説ブームの立役者松本清張が芥川賞作家の枠で、推理小説とは遠い巧みな短篇心理小説「いきものの殻」を寄せているのに対し、新人水上勉がブームの先端をゆく「異色あるスリラー」、いわば社会的な恐怖小説または社会的な戦慄小説を書いているのも興味深い。

しかも、「不知火海沿岸」は雑誌の最末尾に掲載され、作品の最終ページの下段左隅に雑誌の奥付が入っている。つまり、新人にもか

かわらず、最も遅い入稿だったと思われる。それだけ水上勉とこの「不知火海沿岸」は、新しい推理作家、新しい推理小説として編集部で期待されていた。

水上勉は、一九五九年八月に河出書房新社から書下ろし推理小説『霧と影』を出し、「週刊スリラー」に長篇『菓の絵』の連載を始めたばかりだった。私小説的作品『フライパンの歌』（一九四八年）で文壇に登場したが、以後十年文学創作から遠ざかっていた水上勉は、たしかに新たな推理小説界に出現した「新人」である。しかし、この「新人」というポジションこそが、新しい傾向の推理小説にとつて望ましい称号ともいえた。

『推理小説展望』<sup>(3)</sup>で中島河太郎は、一九五六年から一九六四年までの年度別「日本推理小説界展望」の一九五九年の項に書いている。「突如現れた新人に『霧と影』の水上勉がある。二つの土地に跨がる捜査の進展、リアルな描写が重厚味を添えており、解決に至る過程に脆弱な点が見られるが、構想力、サスペンスともに水準をぬいている。／一般に松本清張の出現以来、社会的事象に取り組む傾向が強く、応募原稿などにも従来のトリックのみに依存する作風は、影を潜めた感がある。通俗誌に氾濫している単なる殺人小説は論外として、謎解きの骨格が弱いために、スリラーないしサスペンス小説への移行が目立って来た」。

『別冊文藝春秋』編集部が「不知火海沿岸」に付した「新人による異色あるスリラー、水滸病発生によって暴動化する地方都市を中心に謎の殺人事件勃発!」という言葉は、推理小説とはいえ、事件による謎の提示にはじまり謎解きと事件解決にいたる推理小説的要

素の後退と、社会的事件による恐怖の増大という、新しい推理小説のありかたを肯定的にとらえた言葉といえよう。編集部は『霧と影』で突如出現した社会派推理小説家水上勉の短篇「不知火海沿岸」を評価し、積極的に押しだそうとしていたのである。

## 2 「不知火海沿岸」から『海の牙』へ

みずから「私の文学三十年」とよぶエッセイ「冬日の道」<sup>(4)</sup>で水上勉は、「不知火海沿岸」の成立について次のように書いている。

テレビをみていて、熊本に起きた水俣病の悲惨さにびつくりしたのは間もなくである。私は、なけなしの金をもって、南九州へ出かけた。あてもない旅だった。水俣市へゆき、つぶさに患者の症状や工場の実情をみた。誰の紹介もないので、旅はつらかった。熊本読売新聞支局は駅から山へのぼった邸宅風の家で、そこに和服をきた壮士風の支局長がいた。私は名刺をだして、水俣病関係の官庁、病院の人びとへの紹介状をもらった。さらに熊本日日新聞をたずねて、担当記者にも会った。約十五日間、熊本と水俣を往復しているうちに、金をつかいはたした。帰ってくると、文藝春秋社の池島信平氏の代理の大塚さんがきた。短篇を書いてみないかとのことだった。水俣のノートを取りだして書きはじめた。「不知火海沿岸」という七十枚の作品である。

ここでテレビとは、一九五七年一月から一九六四年の四月まで、NHKテレビで毎週日曜の夜に放映されていたドキュメンタリー番組『日本の素顔』で、水上が観たのは、その第九十九集にあたる『奇病のかげに』である。放映時間は、一九五九年一月二十九日二時三〇分から二時三十分まで。水上勉は、この番組を観てすぐ、水俣行きを決め、翌日三〇日には東京を発った。それから「約十五日間」熊本と水俣で、患者、新日本窒素工場、行政、熊本大学などを取材して帰京し、一流雑誌のひとつ「別冊文藝春秋」からの初めての注文に即応し、取材ノートをもとに作品を書いた。文中「七十枚」とあるのは、二度書き直す前の分量の記憶だろう。

十二月の末には雑誌が発行されるのだから、「不知火海沿岸」の執筆時間は、帰京を十二月十五日頃とすれば一週間そこそこのところだろう。作品執筆を目的とした取材だったとして、取材と執筆構想および下書きがかさなっていたとしても、実際の取材開始から最終的な書き上げまで二十日足らずである。取材対象の切迫性にも促された、凄まじい創作欲と集中力といわねばならない。

しかし、書き上げられた「不知火海沿岸」は、それで終わりにはならなかった。「冬日の道」は続く。

ところで、「別冊文藝春秋」に「不知火海沿岸」が出ると、坂本一亀さんが飛んできて、あれではしり切れとんぼだ、何の解決もついていない、一挙に三百枚ほどつけ足して本にしてみないか、といった。私は考えこんでしまった。水俣奇病の犯人は、まだ日本窒素と決まっていなかったし、門外漢の私など、十五

日やそこらの調査で、専門的な知識はいわずがなだし、複雑な事件の裏側がわかるはずもなかった。しかし、奇病患者の苦境をこの目でみてきたのはたしかだった。工場犯人説を主張する家族の声もきいていたし、自分流ながら調べた事どもへ、殺人を投げこんで、両方どもの犯人を小説の上で出してみるのがおもしろい。／約四ヵ月かかって、『海の牙』を完成している。

ただし、これはほぼ十年後の回想である。「不知火海沿岸」と『海と牙』との関係について最も早く言及した一九六二年の『霧と影』『海の牙』を書いた頃<sup>5)</sup>で水上勉は、「不知火海沿岸」という試みへの作者の確信をはっきりと記していた。

なるほど、「不知火海沿岸」には殺人はあった。しかし、なぜ殺されたのか。何故そんな死に方をしたのか。すべてを謎にして、作者は読者と共に、犯人のことや、かなしい水俣病のことを考えようではないか、とつき放したところに意味があると信じていた。ところが、坂本氏の熱意ある再度のすすめで、私はこの殺人事件に犯人を出し、水俣病犯人を出す決心をした。

坂本一亀の要求する「推理小説」としての解決、完結とはまったく異なる、水上勉なりの解決、完結のイメージを、「不知火海沿岸」を書きあげたとき水上勉はいだいていたことになる。水上勉のその思いは、水俣病の「犯人」はほぼ工場と特定されながら、解決どころかその糸口さえ見いだせず、出来事の完結など及びもつかない、

当時の水俣「奇病」の由々しく禍々しい未解決、未完結と重なっていた。この文章が、編集者坂本一亀のいる河出書房新社から出る本のあとがきの体裁で書かれたことを考えあわせれば、「尻きれとんぼで何らの解決がついていないから、完結させろ」と「不知火海沿岸」＝未完成作品とした坂本一亀への精一杯の抵抗とみなすべきか。

### 3 同じ社会的出来事をめぐる別種の試み

坂本一亀は、水上勉が発表の当てもなく書いていた『霧と影』を刊行にまで引つ張ってくれた恩人である。一九二一年の生まれで、一九一九年生まれの水上勉とほぼ同世代といつてよい。

当時坂本一亀は、一九五七年に倒産した河出書房を河出書房新社として再出発させるために、出版企画の主軸を第一次戦後派作家の作品から、当時ブームだった推理小説へと転換するために動いていた――同僚だった田邊園子<sup>6)</sup>が書いた『伝説の編集者 坂本一亀とその時代』<sup>(6)</sup>には、坂本一亀が推理小説制作に打ち込まねばならなかった社内事情と、その猛烈な活動が詳細にえがかれている。

坂本一亀は、直木賞受賞の推理小説作品を収録した多岐川恭の短編集『落ちる』と戸板康二の短編集『団十郎切腹事件』を、一九五九年一九六〇年と相次いで河出書房新社から出している。直木賞受賞作ともなれば売り上げも跳ね上がる。坂本一亀は続いて水上勉に推理小説で直木賞を取らせたかったに違いない。

実際に、『霧と影』、『海の牙』は、それぞれ一九六〇年一月、同年七月と連続で、直木賞候補作となる。前者は司馬遼太郎が『梟の



城』で受賞（第四二回）し、後者は池波正太郎が『錯乱』で、戸板康二が『団十郎切腹事件』他で同時受賞（第四三回）して、受賞は叶わなかったものの、推理小説の新人として水上勉を売りだそうとする坂本一亀の狙いはけつして外れてはいなかった。一年後、水上勉は『別冊文藝春秋』第七五号に発表した推理小説『雁の寺』で、第四五回直木賞を受賞している。

しかし、書き下ろし作品であった『霧と影』はともかく、次作の『不知火海沿岸』については、坂本一亀の狙いは水上勉の同作品への思いとは一致していなかった。取材から執筆まで凄まじい勢いでおしすすめ発表した短篇を認めず、事件を完結させた長篇にという編集者の強引な勧めが、推理小説の「新人」とはいえ創作歴のながい作者の矜持を傷つけたということもあったかもしれない。とはいえ、この強引な勧めが作者にとって、『不知火海沿岸』で試みたこと、試みなかったことを逆に明らかにした。対象を問わずあくまでも推理小説的完結と解決を求める坂本一亀と、悲惨な出来事に直面して、推理小説的な完結と解決の当てはめ不可能性をこそ小説化したいと望んだ水上勉の対立である。

勧めに従い、『海の牙』として書き直すなかで浮かびあがってきた対立を、作品完成後の水上勉はいつそうはつきりとみつめることになる。『冬日の道』でこう続ける。『海の牙』は、「昭和三十五年の探偵作家クラブ賞を授与されたが、世評をあびたにもかかわらず、作者としては、大きな不安が生じた。いや、不安というより、空虚感であった。というのは、せっかくの材料を、推理小説仕立てにしたために、追跡が、いくらか横にそれたことである。かりに、横にそ

れなくて、ある程度、奇病の実態を訴え得た満足感はあったにしても、推理小説では話にならなかった。それは絵空事の弱さだった。奇病に苦しむ患者の、一滴の涙にも値しなかった。私はこの二冊目の著書でにわかに社会派の名を冠せられたことへの恥ずかしさにうろたえ、世評が高まれば高まるほどに、冷たく背中を吹く風を感じたのである」。

では、こうした「推理小説」への抵抗感から、『霧と影』と『海の牙』の試みは空虚なものとしてのみとらえられていたかといえば、そうではなかった。『不知火海沿岸』には殺人はあった。しかし、なぜ殺されたのか。何故そんな死に方をしたのか。すべてを謎にして、作者は読者と共に、犯人のことや、かなしい水俣病のことを考えようではないか、とつき放した。試みである短篇『不知火海沿岸』が、失われた可能性として水上勉の頭をよぎる。「不知火海沿岸」と『海の牙』は、同じ社会的な出来事をめぐる別種の試みであったという思いである。

たしかに、「不知火海沿岸」は、『海の牙』に吸収された。単行本にも全集にも単独の作品として収められることはなかった。しかし、水上勉の作品への確信と愛着は残った。一九六五年に出た『日本代表推理小説全集 4 残酷・復讐篇 不知火海沿岸』で、「不知火海沿岸」は巻頭におかれている。雑誌掲載版と比べると明らかに作者の手が入ったことを思わせる表記、表現上の修正が多々ある。シリーズ編纂者の求めに応じ、作者はこの作品を独立したものとしてみなし、いつそう読みやすく、完成されたものにするべく手をくわえたのは疑いようがない。

評論家の石川喬司他による「解説」には、こう記されている。

「『残酷』編の冒頭の『不知火海沿岸』は長編『海の牙』の原型と言われるが、読者にとっては水上勉のユニークな手法を知るうえに、絶好の短篇である。九州の貧しい漁村にひろがる無気味な奇病を発端として、ひとつの殺人事件を追及するうちにその背後にひそむ社会悪の実相が浮かびあがってくる。この手法は残酷な社会をえぐりだすうえに、たいへん有効な武器となり、推理小説界に新風を吹きこむとともに、社会派推理小説のひとつの方向を決定づけたのである」。

この評言に接して、水上勉はあらためて「不知火海沿岸」の意義を確認したはずである。

では、「不知火海沿岸」とはどのような試みだったのか。「別冊文藝春秋」掲載版をテキストに考察する。

#### 4 架空都市「水潟市」の意義

タイトル「不知火海沿岸」で実在の場所に接した読者が、物語冒頭で出会うのは、「水潟市」という架空の都市である——「水潟市は南九州の熊本県と鹿児島県境にちかい海岸にある」。

「不知火」には「しらぬい」とルビが振られているのに対し、「水潟」には振られない。「みずかた」か「みずがた」か、さらには「みなかた」か「みながた」か。はつきりしないものの、<sup>(9)</sup>それがかえって「水潟市」の作品での動かしがたい「実在性」を際立たせる。

では、なぜ「水潟市」なのか。水上勉は「水潟市」にした事情について次のように回想している。<sup>(10)</sup> NHKのテレビ番組『奇病のかげ

に」で水俣市に発生している「奇病」すでに新聞などで「水俣病」とよばれていた）を知り、現地取材後すぐ、短篇を求めてきた「別冊文藝春秋」の編集者と作品構想を話した。この折、「まだ奇病なのだから、現実の水俣を舞台にすればモデル問題を起こしかねない。背景は架空都市にしたほうがよい」ということになった。新日本窒素の知り合いに、同じようなものをつくっている会社はないか、水銀をたれ流している会社はと聞くと、水銀をたれ流しているかどうかは知らないが阿賀野川の昭和電工鹿瀬工場がある、という。「そこでは私は、新潟県下にも有機水銀のたれ流しの可能性のある工場があるなら、この奇病を『水潟病』としたくなった。それから六年後の昭和四〇年にこの鹿瀬工場の廃液で第二水俣病患者が出ようとは思ってもみなかった。この時、私は任意の一点に矢を射たつもりでしたが、もう日本中どこにもチツソのように害毒をまき散らしている工場があったでしょう」。

水俣市を作者が水潟市にした理由は、まずモデル問題にあった。未だ原因のはつきりしない、そして全貌も定かでない<sup>(11)</sup>とされる水俣病の真相に踏みこまず、それまでに報道その他で知られていること以上のことを描かないのであれば、モデル問題は生じない。

ただし、架空都市にしたのはモデル問題にならないようにするというネガティブなものではなく、むしろ、物語によって水俣病の真相に大胆に踏みこみたいという作者のポジティブな姿勢からだっただろう。

その一端は物語の中で、主人公で医師の木田民平（水上勉と同世代に設定）が、東京から来て何故か奇病を調べてまわっている保健

医結城宗市（水上勉と同じく詳細なノートを作成）の「先生、やつぱり犯人は工場ですね」との問いかけにひきいれられ、自分の考えを述べるところにもあらわれている。排水口移転によって新たな患者が出たことをあげた木田は、工場犯人説をほのめかしつつ、にもかかわらず工場側はアリバイを主張すると述べ、「漁民の激怒する理由ですよ」と応じる。木田は自分の興奮にかすかな悔いに似たものを感じながら、しかし、「奇病の原因について自分の意見を述べ終わった後に感じる快感も味わっていた」。

水俣市を作者が水潟市にした理由の第二は、水俣市にある新日本窒素の工場と同じ製品をつくっている工場が、新潟県東蒲原郡鹿瀬町にあったからである。「水潟」は、「水俣」を保持しつつ別の場所「新潟」を喚起させる。

他の場所にも同様の工場があるのではという水上勉の疑問は、当時行商をしていた洋服が奇しくも新日本窒素でつくられていたアセテート生地からできていたことに発するらしいが、一所での出来事が同時に多くの場所できている、起きつつあるという発想にささえられていた。推理作家の発想というよりは、すぐれた社会派作家の発想であり、想像力である。そしてこの想像力は、全国で同じようにはじまっていた高度経済成長の破竹の勢いと、やがて「公害」とよばれるようになる暗い負の部分を同時にとらえていた。「もう日本中どこにもチッソのように害毒をまき散らしている工場があったのでしょう」という水上勉の言葉は、けっして後の回想ではなかったらう。

作者にとって「水潟」は「水俣」であり「新潟」であり、そして、全国の都市であった。逆にみれば、全国の都市である「水潟」での出来事として最も凝縮され、かつ突出してあらわれたのが、水俣市でありそこでの水俣「奇病」だった。

高度経済成長期に加速する工業化と圧せられた第一次産業および「奇病」によって、日本の最暗黒をになう架空都市、それが「水潟」なのである。

## 5 神話的世界の華やきの只中に出現した「革命」

物語はまことに穏やかな情景からはじまる。

水潟市は南九州の熊本県と鹿児島県境にちかい海岸にある。

海は不知火の名で親しまれている八代潟である。水潟市は県境の山系から流れてくる水潟川の河口にあるが、近辺には大小数多の岬が、海にむかつて楯目になって没している。入りくんだ幾つもの小湾は、内海らしい落ちついたたずまいで、波もあらくないし、いつも群青の水が静かな山影をうかべている。

「親しまれている」、「落ちついたたずまい」、「波もあらくない」、「静かな山影」など情景への語り手の親和感をあらわすモチーフが反復する。また、「大小数多の岬<sup>（イシ）</sup>」や「入りくんだ幾つもの小湾」といった、他を威圧する一者を許さぬ個々別々のものの落ち着きと華やきが情景にはみちている。不知火で知られる神話的世界かつ民話

的世界の静かなただずまいから物語ははじまる、ただひとつ、水潟川の河口にある水潟市を除いては――。

小説「不知火海沿岸」発表直後に石牟礼道子によって開始され、後に『苦海浄土 わが水俣病』としてまとめられた文章の冒頭、子どもたちの嬌声にあふれた前近代的风景と不吉な排水溝との対比を思わせる。しかもなおこの「不知火海沿岸」は、元私小説作家による純文学的な筆致でもって、構造の妙を織りなしていく。

つぎに舞台は一転。周囲の情景とはちがう、水潟市の異様な光景が出現する。

この市は工業都市である。しかし、目立った工場は一つしかない。東洋化成工業水潟工場というのがそれである。工場は駅前の卵型になった広場から、百メートル入った地点に、巨大な軍艦のような相貌で建っている。硫安、塩化ビニール、醋酸、可塑剤、などが生産の中心になっているが、そのうち、塩化ビニールが主力だといわれている。透明な風呂敷や汚れの落ちるテールクロスが繊維を革命したように、その原料である塩化ビニールはこの工場の伸展の原動力になったし、水潟という小さな漁師町が、人口五万の市に昇格したのも、革命といえないこともなかった。この事件の起きた年度は、五万の人口の約半数が、工場関係労働者であり、この市の市民だった。

他を威圧するどころか、比べるもののない一者――一社である東洋化成工業水潟工場が巨大な軍艦のように市に君臨する。不知火の穏

かで静かな、そして個々別々のもののもたらす華やきはたちまち消失、語り手の親和感とは異和感にかわるが、そんな異和感をも突きぬけて語られるのが「革命」である。工場の進展は「革命」と形容され、小さな漁師町が大きな工業都市となったのもまた「革命」かもしれない、と語られる。

しかも、その「革命」には、工場の経営陣を筆頭に多くの「工場関係労働者」も同様にかかわっている。資本家と労働者との階級闘争における革命ではない。資本家と労働者が力をあわせてつくりだす「革命」である。こうした奇妙な「革命」の主体が「市民」と呼ばれる。

語り手は不知火海沿岸の神話的风景を一変させてしまった工場の進展を一方で非難しながらも、他方でそれがもたらす都市の発展を認めないわけにはいかない。しかし、語り手はどつちつかずの見方で水潟市の紹介を終わらない。そんな「革命」のステージそのものに、たちまち、否定的で強烈な臭気をかぶせる。

市の駅前に工場がデンと正門を構え、幾本もの高い煙突から黒煙が吐きだされている。市の空が灰色に染められている有様は活気にあふれていた。が、市には工場から出る化学薬品とカーバイドの残滓の臭いがそこいらじゅうに充ちていた。その臭気は鼻腔につきささるような匂いがある。花粉のように舞い下りる石灰が、家々の屋根を灰色にしているように、この臭気はどここの台所をもふく風に溶けこんでいた。



活気はあるがひどい臭気もある、ではない。また、臭気はあるが活気も感じられる、でもない。黒煙を吐きだす活気と風に落っこむ臭気が同時にある、これが工業都市である水潟市中心部のありかただった。

## 6 棄民と奇病の社会的地理

こうした「革命」の活気からも臭気からも排除された場所があった。「不知火海沿岸」の冒頭を続けてみてみよう。

しかし、市の背後は屏風のように、三方から山がかこんでいる。緑濃い闊葉樹と針葉樹が豊かに茂っている。岬もまた黒々とした樹林である。その岬が、山ふところに入江を抱えこむあたりに、急斜面な断崖が見え、裾の方には散在した漁民部落が見える。漁師の家はトタンや杉皮ぶきの粗末な小舎のようなので、背中を向け合ったり、横向きになったりして、まちまちに建っていた。

物語冒頭に登場する不知火海沿岸の神話的世界そのままの自然が、親和性のもとわずかに語られてすぐ、漁民部落があらわれる。自然と落っこむ素朴でおだやかな漁民部落とはまったく異なることに注意したい。素朴さと多様さがむしろ「粗末」で「まちまち」にみえてしまう漁民部落である。

これは明らかに大工場を要に機能的に配置された市の中心部との

対比のもとに語られているが、たんなる対比でないのは「小さな漁師町が、人口五万の市に昇格した」とあるように、漁師町から工業都市への発展が市民には肯定的に迎えられていること、そんな発展から見捨てられたのが漁民部落であることからはっきりする。

市の中心部と漁民部落との空間的な距離は、革命に湧き立つ不可逆の時間的距離であり、また、優劣の刻印された社会的な距離でもあった。この社会的な距離において、少数派である漁民は多数派の市民に捨てられた「棄民」と化していた。

空間的かつ時間的な距離および、社会的な距離がまるごと可視化されたものをここで「社会的地理」と呼べば、物語の冒頭で語られてきたのは、水潟市の社会的地理である。しかし、この社会的地理は「棄民」を確定して終わりにはならなかった。

漁民たちの「棄民」化は、じつは、数年前の「奇病」発生によってさらに進んでいたのである。いったい、「奇病」とはなにか。

昭和三十一年の四月はじめに、水潟市から南へ三キロほど入った地点にある星の浦という部落で、九歳になる女の子が、とつぜん、物が握れなくなり、四肢がふるえだし、関節が急にきかなくなり、言葉もろくにしゃべれない、という奇妙な病気にかった。この娘の父親は、前日、娘が、日ごろから顔色が悪かったのかわびを取ってきて喰わせた。あわびのはらわたは薬だといわれていたからであるが、その時はまだ病気の徴候はなかった。翌朝朝飯の時に、娘は茶碗をぼろりと落した。何ぞ持ちあげても落した。と、急に、娘の体にけいれんが起きた。

おこりがきたようにふるえるのである。歩こうとしても足がふるえてすまない。声が出しくくなり、顎がはずれたように口もとを半びらきにしたまま、苦痛を訴えはじめた。慌てた両親は大慌てで医者にみせたが、日本脳炎といわれて隔離病院へ入れられた。が、その症状がどう見てもおかしい。娘は体をよじらせるようにして逼うのだ。手足をけいれんさし、口からよだれをだしはじめた。瞳孔がうるみだし、何も見えなくなった。これは猫の病気と似ていた。猫は昔からこの地方で、逆立ちをしたり踊り狂ったりする病気で死んでいたのである。「猫踊り病に人間がかつとです」市民は噂した。

女の子の病状を順を追って可能なかぎり克明にたどろうとする語り手の執念は、これまでになく句読点の多い文体にあらわれている。語り手の関心ひいては物語の隠れた主題が、棄民そのものの、奇病そのもの以上に奇病に苦しむ人間によりそうところにあるのがわかるだろう。

棄民のなかの奇病の患者すなわち、社会的地理において最も暗い端におかれた者を、社会的地理の上位に位置する「市民」は、「猫」になぞらえる。人間の上位者が、人間の下位者を人間の外の動物に押しやろうとする。社会的地理の上位者は踏みつけにしている下位者の回帰、そして逆襲をいつも恐怖しているのだ。

しかし、奇病の女の子を「猫」のほうに遠ざけようとする市民の勝手な願いはとおらなかつた。奇病の患者が次つぎにあらわれたのである。同じ星の浦部落の成人の女、そして隣接する湯堂にも、茂

堂にも、米の津にも、丸島にも患者がつづく……。魚を食べる猫と魚を食べる人間とは連続する。「魚に毒があるんじゃ」という漁師たちの不安と恐怖が高まった。

南九州大学の医学部（モデルは熊本医科大学、現在の熊本大学医学部）に「水濁奇病研究班」が自発的にでき、調査が開始された。その結果、工場の排水口に近い湾にドベ（海底泥土）が三メートルも沈殿しており、その中に水銀が含まれている。ドベで汚染した海水中に生息する魚介が有毒化しているのではない。しかし、工場側はこの説を否定する。他にも塩化ビニール工場はあり、しかも永年排水を続けているのに、水濁で最近になってというのは二重におかしい。他の原因にちがいないと否定する工場側と、南九州大との、奇病の原因についての対立が続いている。

とはいえ、重要なのは原因説の対立ではない。「病人はしかし殖える一方で、四年後の今日では八十名のうち三十名が死亡するという事態になった」ことこそが問題なのだ、と物語は告げる。

## 7 暴動からさらなる暴動へ

小説「不知火海沿岸」は始まってまだ間もないが、新しい推理小説を求める読者は、この物語冒頭の二ページと少して、すでに推理小説のストーリーラインが提示されていると思ったにちがいない。

水濁市の社会的地理に深く根差した奇病という出来事が起きた。原因は何で、犯人は誰なのか。工場犯人説とそれ以外のいくつもの犯人説が対立し、謎は深まるが、死者は増えつつける。やがて犯人

がうかびあがり、犯人を支える社会的地理そのものが鋭く告発されるだろう――。

しかし、こうした社会的ひろがりやを推理小説に期待する読者は、続いて登場する医師の木田民平が、もうひとつの出来事に発する推理小説的ストーリーラインをたずさえていることに気づく。謎の男（東京の保健医で結城宗市）と、謎の男たち（自称工学博士浦野幸彦、助手錦織季夫）が登場し、次つぎに姿を消す。どうやら密かに殺しが行われているようだ。出来事の背後にはなにがあるのか、そして事件はどんな解決をみるのか、というストーリーラインである。

水潟市の社会的地理と奇病にかかわる規模の大きな出来事をめぐるストーリーラインと、謎の人間関係と隠された殺人事件をめぐるストーリーライン。水俣で起きている奇病の実態をふまえつつここにきりこむ前者と、奇病の周囲で起こりうるかもしれない架空の事件にかかわる後者とが、陰に陽に共闘しつつ、それぞれの解決をめざす。

しかし、解決をめざす二つのストーリーラインがみえてくれば、くほど、物語をつきうごかすもう一つの暗い力もまたみえてくる。奇病にとつてはたして解決とはなにか。原因究明か。原因がわかったとしても奇病はなくなるのか。ここまで放置した工場と政治が動くのか。奇病で危機に瀕した漁業の回復はいつになるか……。これらの疑いを爆発させる「漁民の怒り」のかぎりのない高まりというストーリーラインである。

物語は二つの大きな暴動にはさまれているといっても過言ではない。二つの暴動はともに、新聞報道として登場する。最初の記事は

「水潟にふたたび不穏な気配／十日の漁民大会にダイナマイトで工場爆破説！」<sup>〔1〕〔2〕</sup>が見出しとなっている。一九五九年一〇月四日の夕刊である。

去る二日、水潟奇病による沿岸漁業の危機を訴えて東洋化成工業に団交を申込み、これが拒絶に会って激怒し、暴民と化した不知火沿岸漁民代表三百名は、同工場正門で応援警察隊と激突、二十数名の負傷者をだす不祥事をひき起こしたが、それから二日目の四日午後一時、またまた、県警本部に、漁民攻勢第二波の物騒な噂がキャッチされた。確実な情報通の語る所によると、県漁連は来たる二十日に水潟市公会堂で、東洋化成工場排水停止促進大会をひらき、そのあと漁民大会のデモにうつるが、この日は漁民側より代表者を工場に送り、漁業保障と排水停止の回答を強硬に迫るものとみられる。当日若し万一、工場側が二日の如き一方的硬化の態度に出た場合は、全漁民は天草、葦北、八代地方より約三千の船団を組んで水潟市に上陸する。漁民のうちには、ダイナマイトを用意して工場排水口の爆破も止むなしとする過激人員も多数加わっている模様であるというもの。

この後、緊張する県警本部で緊急会議が開かれ、工場長、水潟市長、警察署長と連絡をとり騒動にそなえて万全の準備にとりかかることなどが決まった、と記される。

新聞報道は明らかに工場と市民生活と体制秩序維持の側に立つ。

それゆえの「暴動」である。奇病患者に日々接し危機におちいった漁民にシンパシーをもちつつ、漁民を抑える警官の治療者でもある警察囑託医の木田民平は、新聞報道とは別の受け止めかたをせざるを得ない。だからこそ木田は勢良富太郎警部補を先導し、結城宗市の死体と、死体に群れる無数の鴉——奇病に侵されあるいは死にあるいは死につつある病鴉を発見するに至るのである。

漁民の暴動をめぐる二つ目の新聞記事は、死体発見の直後、物語のほぼ結末にあらわれる。見出しは「漁民水潟市で再度の暴挙、団交拒否に怒り爆発。警官と激突、百数十人の重軽傷者！」。

水潟奇病のため来水した国会調査団への陳情と、漁民総決起大会のため、三日早朝から水潟市に集まった不知火漁民約三千人は、正午過ぎ団交申入れが東洋化成工場側の拒否にあつたことから、大会を取りやめて、工場に押しかけ、午後一時五十分と六時十五分からの二回にわたって工場内に乱入、施設や機材をたたきこわし、遂に出動した警察と激突、双方に百人以上の重軽傷者を出した。水潟問題は遂に流血の惨事を再度くり返したが、この不祥事は一般市民の強い批判をうながしている。

この朝、船団を組んで百間港に上陸した葦北、八代、天草など不知火海沿岸漁民は、午前十時過ぎ、プラカード、のぼりなどを押し立てて市中をデモ行進、市立病院前に押しかけて、来水中の国会議員団に陳情文を読みあげ「代議士さま、恐ろしい病気で死にかけている漁民を助けてください。どうか工場から汚い毒の水が流れないように、さし止める工夫をしてください

い」と絶叫しながら、ジグザグデモにはいり、氣勢をあげた群集には、母を子を父を奇病に亡くした家族もまじり、前回デモで検挙された漁民八人が告訴された事実に激昂、急に興奮した集団は大会を取り止めて、東洋化成工場正門に雪崩れ込んだものである。工場内事務所、守衛室、配電室等のガラス、器具、電子計算機などを、片っ端から漁民は棍棒で破碎、血を噴きあげた漁民の怒りは絶頂に達した。今夕、ようやく応援警官の出動で鳴りをしずめた水潟市は、恐怖の夜にはいり、市立病院、市内各医院は負傷者の続出で騒乱を極めている。

一九五九年一月三日の「朝日新聞」や「毎日新聞」など全国紙が報じた水俣市における同二日の出来事、すなわち国会調査団への陳情と漁民総決起集会そして「騒乱」という「不祥事」の記事と似て、しかし奇病に苦しむ人々の側へ限りなく寄り添おうとする小説内新聞記事。この記事に続き、「その後、保険医結城宗市殺人犯人逮捕と、浦野幸彦、錦織季夫両名の捕捉されたという話はまだ聞かない」と物語は結ぶ。

お互いに関連しつつ解決を求める二つのストーリーラインに、高まる漁民の怒りのストーリーラインが事態の未解決、解決不可能性を、くりかえし突きつける。

次回は、この三つのストーリーラインのからみが、いかなる物語を織りなしていくかを検討したい。まずは、暴動をめぐる二つの新聞記事が、実際の新聞記事をどのように編成し直していたか、なにを除きなにを加えていたかをたしかめるところからはじめよう。



注

- (1) 「世界」(岩波書店 一九七四年三月) 掲載のエッセイ「金閣と水俣」など。拙稿「『不知火海沿岸』と水俣「奇病」」(和光大学表現学部紀要) 一八号 二〇一八年三月 183・184ページを参照のこと。
- (2) 「別冊文藝春秋」掲載時、著者名には「みなかみつとむ」のルビが振られていた。本稿目次の英字タイトルで MINAKAMI Tsutomu とした所以である。作家水上勉の筆名は、「水上務」「水上若狭夫」「水上若狭男」などを経ており、「水上勉」に固定されてなお、「みなかみつとむ」「みなかみべん」「みづかみつとむ」とルビに揺れがある。読みとして本名でもある「みづかみつとむ」を採ると自身で宣言した一九八六年の文芸家協会の総会、翌年二月の「図書」(岩波書店) 掲載のエッセイ「姓名のこと」の後、「ミズカミツトム」で安定する。
- (3) 中島河太郎『推理小説展望』(一九六五年二月 東都書房刊)。引用は52―53ページより。
- (4) エッセイ「冬日の道」は「東京新聞」の一九六九年一月二〇日から二月末日まで連載された。引用は、『冬日の道』(一九七〇年三月 中央公論社刊) 92ページより。
- (5) 「霧と影」「海の牙」を書いた頃、『カワデ・ペーパーバックス6 霧と影海の牙』(一九六二年八月 河出書房新社) 所収。引用は337―338ページより。
- (6) 田邊園子『伝説の編集者 坂本一亀とその時代』(二〇一八年四月 河出書房新社刊)。
- (7) 「オール読物」(一九六一年一〇月号) 掲載の「選評」で、松本清張は絶賛しつつも次のように評している。「……ただ、小僧が和尚を殺す経過の裏の段になると、それまでの迫力が一挙に落ちてくるのは、いわゆる推理小説の持つ致命的な欠陥であろう」。この評言は、推理小説の手法として『点と線』から多くを学んだ水上勉をつよく揺さぶっただろう。水上勉がいたっていた推理小説への疑いを松本清張に指摘されたのである。
- (8) カッパノベルス『日本代表推理小説全集 4 残酷・復讐編 不知火海沿岸』(一九六五年五月 光文社刊)。「解説」の引用は328ページより。

- (9) 『海の牙』(一九六〇年四月 河出書房新社刊) では「みながた」カッパノベルス版では「みづかた」と異なるルビが振られている。
- (10) 「不知火海 ふるさと若狭、それから」(『朝日ジャーナル』一九八六年五月三日号。引用は13ページより)。
- (11) 「大小多数の岬」は『海の牙』における最も似通った箇所では「大小あまたの岬」となっており、カッパノベルス版で「大小多数の岬」へと書き換えられている。
- (12) 見出し中の「十日」は、つづく記事本文中の「二十日」と符合しない。『海の牙』では「二十日」となっているが、カッパノベルス版では「十日」のままである。なお、この小説内記事本文にも、細かな異同がある。例えば「二日目の四日」は、『海の牙』では「今日の四日」、カッパノベルス版では「三日目の四日」。誤記と思われる「漁業保障」も、『海の牙』カッパノベルス版ともに「漁業補償」へと訂正されている。
- (13) 「不知火海沿岸」における結城宗市の死体発見は一月二九日である。その「四日目」であれば一月二日でなければならぬはずだが、ここに引用した「別冊文藝春秋」版は一月三日、カッパノベルス版では「二日」となっている。ちなみに『海の牙』第十三章「怒りの街」では、国会調査団への陳情および血みどろの騒乱は、史実どおり十一月二日とされている。